

幼児期のアサーションの形成に影響を与える要因の検討 —運動遊び場面での視点取得行動と共感性に着目して—

畠中智恵¹⁾, 中本浩揮²⁾, 幾留沙智²⁾, 森 司朗²⁾

An examination of the factors that affect young children's assertiveness with a focus on perspective-taking behavior in physical play and empathy

Tomoe HATANAKA¹⁾, Hiroki NAKAMOTO²⁾, Sachi IKUDOME²⁾, Shiro MORI²⁾

Abstract :

We examined the relationship between assertiveness, perspective-taking behavior while playing tag, and empathy in young children. Specifically, we examined whether a child's level of assertiveness influences their perspective-taking behavior and empathy. The study participants were eleven 6-year-olds (nine boys and two girls). Each child's homeroom teacher rated their assertiveness and empathy while perspective-taking behavior was measured by observing how the children predicted their playmates' behavior during a game of tag called *takara-tori-oni*. We then classified the children into high and low assertiveness groups based on their assertiveness scores. The results showed that children in the high assertiveness group tended to predict their peers' behavior during the game of *takara-tori-oni* more often than those in the low assertiveness group; however, there was no relationship between the children's assertiveness and their empathy, possibly because all the children had high empathy scores. In conclusion, our findings suggest that perspective-taking behavior during physical play may be related to the formation of young children's assertiveness.

Keywords: assertiveness, preschool children, perspective-taking behavior, empathy, deceleration

和文要約 :

本研究では、第3者によってアサーションが高いまたは低いと評価された幼児が、鬼ごっこ場面でみられる視点取得行動と共感性においてどのような特徴をもつのかという観点から、アサーションの高さと視点取得行動および共感性との関連について検討を行った。対象は、6歳児11名（男児9名、女児2名）であった。アサーションおよび共感性については、各対象児について担任保育士に評価してもらい、視点取得行動については、対象児に鬼ごっこの1種であるたから取り鬼を実施してもらい、その中で対象児が示した他者の行動を予測したような視点取得行動を指標として抽出した。そして、アサーションが高い幼児および低い幼児の特徴について、視点取得行動と共感性の観点から確認した。まず、アサーションに関して尺度得点の平均値を基準に、アサーションが高いと評価されたアサーティブ高群とアサーションが低いと評価されたアサーティブ低群に分類した。その結果、アサーティブ高群は、たから取り鬼で視点取得行

¹⁾ 鹿屋体育大学大学院体育学研究科

²⁾ 鹿屋体育大学

動が多く見られ、アサーティブ低群は、視点取得行動があまり見られなかった。一方で、共感性に関しては全体的に高く、両群で差は見られなかった。このことから、幼児期のアサーションの形成において、運動遊び場面での視点取得行動が関連することが示唆された。

キーワード：アサーション、幼児、視点取得行動、共感性、脱中心化

I. 諸言

うつ病を含む気分障害患者の数は年々増加しており、2017年では1,276千人にも及んでいる（公益社団法人全国労働衛生団体連合会, 2017）。このようなメンタルヘルスの問題に関して、適切な主張ができることが不安を軽減しメンタルヘルスの向上に効果的であることが示されている（アルベリ・エモンズ, 2009; Speed et al., 2018）。よって、適切な主張を可能にするスキルの習得は現代社会において重要な課題であると考えられる。

適切に主張するということにおいて、自らの主張を行いながら他者が自分とは異なった意見を持っていることに気づき、他者の意見との折り合いをつけていく能力の重要性が指摘される（平木, 2009）。このような能力は、社会的スキルの中でもアサーションという主張スキルに分類される。我々の主張スタイルには、自己の意見のみを優先する攻撃的主張、他者の意見のみを優先し自己主張を行わない非主張的主張、そして、他者の主張を受け入れながらも自己主張を行うアサーティブな主張の3つがあり、対人関係の形成・維持にはアサーティブな主張が最も適応的であると考えられている（平木, 2009）。

これまでのアサーションに関する研究では特に、青年期の問題としてアサーションを取りあげてきた（e.g. 柴橋, 2001, 2004）。しかし、アサーションのような社会的スキルの基盤は幼児期に形成されると考えられており（Crockenberg & Litman, 1990）、縦断的研究では幼児期の社会的スキルの高さがその後の社会的スキルの高さを予測することが明らかになっている（松原ほか, 2019）。よって、幼児期に社会的スキルの基盤を形成しておくことは重要であり、そのためには幼

児期において、アサーションの形成に影響を与える要因を明らかにすることが必要になってくる。

ピアジェ（2007）は、幼児期は他者と相互作用する中で自己を認識し、さらに自己と異なる他者の存在に気づき、その他者は自己と異なる視点や考えを持っていることに気づき始める時期であるとしている。そして、DeVries et al. (2000) は、このように子どもが他者との相互作用を経験する中で、他者の視点があることに気づいていくことを、視点取得（perspective-taking）という概念でまとめている。ピアジェはこの視点取得を獲得するためには、子ども同士といった相互尊重に基づいた協同的な（cooperation）社会的関係が不可欠としている（橋本, 2001）。また、カミイ・デブリーズ（1984）は、協同的な社会的関係の観点から、集団遊びは大人のルールや権威から一時的に解放され、自己制御しなければならない状況を作るため、他者の視点に気づきやすいとし、視点取得の獲得に関して、幼児期における集団遊びの有用性を主張している。このように、複数のメンバーで同一のイメージやルールを共有することが求められる集団遊びの中では、他者の視点を理解することが鍵となるが、この他者の視点の理解に関して重要な役割を果たすのがからだである。

千葉（1990）は、我々は他者の行動を認知することで自己の行動を決定するだけでなく、他者の行動を認知せずに直接知覚するという方法で自己の行動が決定されることがあると述べている。このことは、我々は他者を直接知覚すると同時に、他者を知覚する自分自身を知覚していることを示している。この知見に基づくと、認識の場としてのからだ（佐々木, 1987）は他者を理解し自己の表出を決定するうえで、重要な役割を演じている

と考えられる。そして、このからだは、年齢が低いほど他者との関わりの中で核となっている(佐々木, 1987)。また、この直接知覚としてのからだの視点から、森(1999)は、幼児は遊びの中でお互いに身体を共振させることで遊びのイメージを共有しているケースがあることを報告し、幼児にとってのからだの重要性を述べている。つまり、幼児は遊びの中でからだを使って他者と関わることで他者の行動を理解しており、他者を理解することにおいて集団遊びの中でも運動遊びが重要な役割を果たすと考えられる。さらに、他者理解が表出されやすい運動遊びとして、カミイ・デブリーズ(1984)は鬼ごっこを取りあげている。鬼ごっこでは、追いかける役と逃げる役という異なる立場を経験するため、他者の視点に立った行動が表現されやすいと考えられている(カミイ・デブリーズ, 1984)。

視点取得に関しては、対人葛藤方略と関連するとの報告があり(Abrahami et al., 1981)、視点取得の高さが対人関係の形成と関連すると考えられる。このような考えを基に安藤(2014a)は、視点取得を他者との関係形成や維持を規定する要因の1つとして考えている。そして、安藤・新堂(2013)は、対人関係を促進すると考えられているアサーションに着目し、視点取得が未熟で自己中心的視点が強い非行少年を対象に、視点取得の高さと主張スタイルの関連を調査した。結果として、視点取得の発達段階が高い非行少年ほど対人葛藤場面でアサーティブな主張をする者が多いこと、さらに、視点取得の発達段階が上がるに連れアサーティブな主張をする者も増加することを明らかにした。このことは、視点取得がアサーションと密に関連していることを示唆している。

一方で、溝川・子安(2015)は、アサーティブな主張を含む社会的行動を促進するためには、視点取得だけでなく共感性が重要であると主張している。実際に、関係性攻撃を行う幼児は他者の視点に立つことができるとの報告があるように(畠山・畠山, 2012)、他者の視点に立てることは攻

撃的な行動に繋がる可能もある。また、適切なアサーションには共感的な要素が必要であることや(Romano & Bellack, 1980)、相互交渉場面において共感的な要素が欠けた自己主張は攻撃的な主張と見なされてしまうため、適切な主張を行うためには共感的な要素を含んでいる必要があることが報告されている(Mnookin et al., 1996)。そのため、アサーティブな主張を行うためには視点取得が必要と考えるが、他者の視点を理解できることに加えて共感性も高い必要があると予測される。

以上のことより、本研究では、第3者によってアサーションが高いと評価された幼児およびアサーションが低いと評価された幼児が、鬼ごっこ場面でみられる視点取得行動と共感性においてどのような特徴をもつのかという観点に立ち、アサーションの高さと視点取得行動および共感性との関連を検討した。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者および調査期間

A 県のこども園に所属する6歳児14名(男児10名、女児4名)、平均年齢は67.80ヶ月($SD=3.06$ ヶ月)であった。子どもは1日の多くの時間をこども園で過ごしていること、本研究が社会的な発達に焦点を当てており社会的な状況の中での対象児の反応に着目する必要がある点を踏まえ、アサーションと共感性に関する質問紙は、調査対象児の担任保育士(経験年数4年)に回答してもらった。調査は、2018年6月中旬および2018年12月に行った。

2. 倫理的配慮

協力園の代表者および質問紙の回答者である保育士に対し、調査の趣旨の説明を行ったうえで研究への協力の承諾、園経由にて保護者の同意を得た。また、調査協力にあたり、個人の意思でいつでも協力を中止できること、そしてそのことによる不利益は一切被らないこと、結果は統計的に処理され個人のプライバシーは守られることについ

でも十分に説明を行った。なお、研究の実施方法については所属研究機関の倫理審査委員会の承認(第15-19号および第15-80号)を得たものである。

3. 調査内容

(1) 幼児のアサーション測定

幼児のアサーションを測定するために、幼児用主張行動尺度(畠中, 2020)を用いた。この尺度は、日常生活における様々な場面での幼児の行動を攻撃的-アサーティブ-消極的と連続上で捉えることができる他者評価型の尺度である。回答の方法は、ある対人葛藤場面において、「極めて攻撃的(2点)」「攻撃的(1点)」「アサーティブ(0点)」「消極的(-1点)」「極めて消極的(-2点)」の5つのカテゴリに相当する行動の中から対象児が最も採用するであろう行動を1つ選択してもらう。そして、選択された回答の得点を絶対値化したうえで、全ての得点を合計する。質問項目は15項目であり0~30点の範囲で得点が算出される。得点が0に近いほどアサーティブであり、得点が高いほど攻撃的か消極的な行動を選択しているためアサーティブではないと捉えられる。そのため、合計した得点を「非アサーティブ得点」と命名した。

(2) 視点取得行動

園庭にて、たから取り鬼を実施し、その中で見られる視点取得行動を分析対象とした。たから取り鬼とは、2チームに分かれ陣地の場所を決め、その中に宝を置き、相手の陣地にある宝を取るというゲームである(Figure 1)。陣の外では全員がオニでもコでもあり、自陣を出ているときに相手にタッチされた場合は相手の陣に捕まり、味方がタッチしてくれたら復活することができる。つまり、たから取り鬼では、全員が同時にオニとコの役割を担うという特徴があり、通常の鬼ごっこに比べ、常に他者の視点に立つことが求められるデザインであるために採用した。7名ごとの2チームに分かれ、相手の宝を取り、自分たちの陣地に持ち帰ることができた時点で終了とし、合計

3回実施した。計測時間(スタートからどちらかのチームが相手の宝を取るまでの時間)は、1回目が3分20秒、2回目が2分20秒、3回目が6分20秒であった。実施回により計測時間は異なるが、どの実施回においてもメンバーやチームの構成は同一であったため、全ての計測時間を分析対象とした。なお、たから取り鬼の様子は、園庭の4角から計4台のカメラで撮影した。

また、視点取得行動については、カミイ・デブリーズ(1984)によって、子どもは鬼ごっこの中で他者視点を取得すると他者の到達地点を予測し、そこに向かって直線的に移動するようになる(近道をするようになる)ことが報告されている。そのため、本研究ではオニ役割時の行動のみを対象とし、狙う相手を見つけそのコが到達する地点を予測したうえで、より近い道のりで到達するような行動を視点取得行動と定義した(Figure 2)。

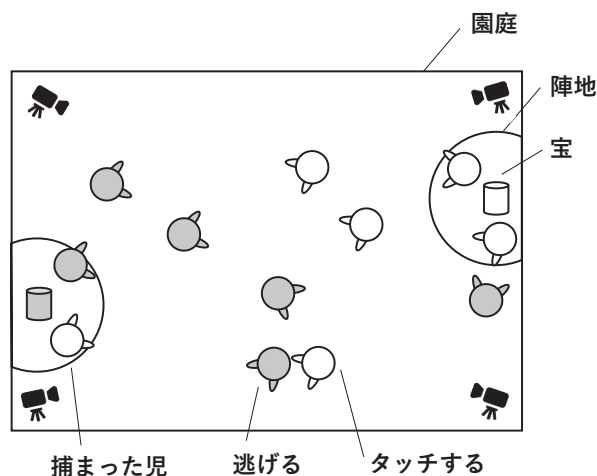


Figure 1. たから取り鬼のルール概要図

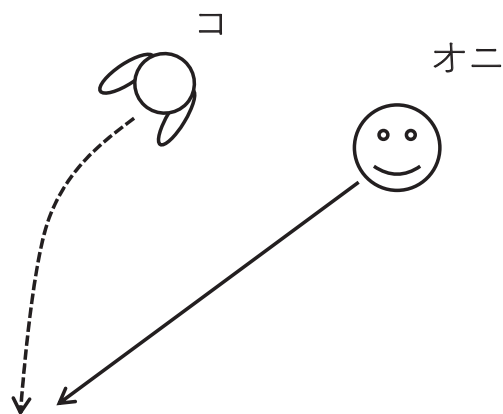


Figure 2. 本研究における視点取得行動

(3) 幼児の共感性測定

幼児の共感性測定には、森下(1990)の作成した幼児用の共感性尺度における感情としての共感性を測定する因子を用いた。森下(1990)の尺度では、感情としての共感性を測定する、まわりの人や状況に対して無関心で共感性の希薄な「無関心」因子(6項目)、同情や共感反応を示しやすい子どもの特徴である「感受性」因子(7項目)、行動としての共感性を測定する、共感性に基づいた行動で思いやりやいたわり行動を示す「いたわり」因子(7項目)で構成されているが、アサーションは他者を配慮するという思いを持つことで適応的な主張として捉えられるため、感情としての共感性のみを使用した。回答方法は、「そうだ」「ややそうだ」「どちらともいえない」「ややちがう」「ちがう」の5件法を用いた。

4. 分析方法

幼児用主張行動尺度の非アサーティブ得点の平均点を基準に、平均値よりも得点の低い群を「アサーティブ高群」、平均値よりも得点の高い群を「アサーティブ低群」とした。次に、たから取り鬼の映像より、それぞれの対象児についてカミイ・デブリーズ(1984)の視点取得行動に則り、GameBreakerV8を用いて視点取得行動を抽出した。具体的には、オニ役として相手が到達する地点を予測し、より近い道のりで(より直線的に)その地点に到達するような行動である。これに基づき、明らかに本研究の視点取得行動に当てはまる行動を抽出し、不明瞭な行動についてはスポーツ心理学および幼児発達分野に精通する者と著者とで確認を行い、視点取得行動としての抽出を検討した。ただし、アサーションとの関連を検討する際には、オニ役として他児を追いかけた機会の頻度の違いを考慮し、各対象児でオニ役の回数を抽出したうえで、オニ役の合計回数に対する視点取得行動の回数を割合として算出した。そして、マンホイットニーのU検定を用いて、アサーティブ高群とアサーティブ低群で視点取得行動の

割合、および、共感性得点を比較した。

なお、本研究における統計的処理はSPSS Statistics 25.0を使用した。

Ⅲ. 結果

たから取り鬼でオニ役の見られなかった3名を除外し、11名(男児9名、女児2名)を分析の対象とした。対象児の平均年齢は68.18ヶ月($SD=2.85$ ヶ月)であった。

1. 非アサーティブ得点による群わけ

対象児全体の非アサーティブ得点の平均値は14.36点($SD=3.53$)であった。平均値よりも得点の低い対象児は「アサーティブ高群」とし、得点の高い対象児を「アサーティブ低群」とした。それぞれの群の非アサーティブ得点はTable 1の通りである。それぞれの群の非アサーティブ得点に違いがみられるかについてマンホイットニーのU検定を用いて確認したところ、両群に有意な得点の差が見られ、加えて高い効果量が得られたため($U=0.00, p<.01, r=-.81$)、それぞれの群のアサーティブ行動の程度に明確な違いがあるといえる。

2. アサーティブ高群および低群の視点取得行動の割合と共感性

各対象児のたから取り鬼での視点取得行動を抽出し、全オニ役に対する視点取得行動の割合を算出したところ、0%から80.0%の範囲で視点取得行動の割合が見られた。また、アサーティブ高群の視点取得行動の割合は42.5%、アサーティブ低群での視点取得行動の割合は13.3%であり、アサーティブ高群の方が視点取得行動が多く見られた($U=5.00, p<.10, r=-.52$, Table 1)。

次に、アサーティブ高群および低群の共感性の高さについて検討したところ、アサーティブ低群に比べアサーティブ高群の得点がやや高い傾向が見られたが、群間に有意な差は認められなかった($U=7.00, n.s., r=-.41$)。

Table 1. アサーティブ高, 低群ごとの視点取得行動の割合と共感性得点

アサーティブ群		非アサーティブ 得点	視点取得 行動の回数	オニ役割の 回数	視点取得 行動の割合	共感性 得点
高群	A 児	10	3	6	50.0%	41
	B 児	10	2	11	18.2%	40
	C 児	12	4	5	80.0%	41
	D 児	12	2	4	50.0%	44
	E 児	13	0	4	0.0%	44
	F 児	14	4	9	44.4%	41
	G 児	14	6	11	54.5%	44
計		12.14	21	50	42.5%	42.14
低群	H 児	16	0	23	0.0%	39
	I 児	18	3	9	33.3%	41
	J 児	18	1	5	20.0%	43
	K 児	21	0	8	0.0%	40
計		18.25	4	45	13.3%	40.75

IV. 考察

本研究の目的は、第3者によってアサーションが高いと評価された幼児およびアサーションが低いと評価された幼児が、鬼ごっこ場面でみられる視点取得行動と共感性においてどのような特徴をもつのかという観点に立ち、アサーションの高さと視点取得行動および共感性との関連を検討することであった。結果として、アサーションが高いと評価された幼児は低いと評価された幼児に比べ視点取得行動の割合が高いことは示されたが、両者の間に共感性の差異を明らかにすることができなかった。

幼児のアサーションの高低において鬼ごっこの中での視点取得行動の割合の差異が示されたことは、アサーションの基盤を形成する時期であると考えられる幼児期において、視点取得の経験を含むような運動遊びが重要な役割を担うことを示唆している。ピアジェ (2007) は、自発的に行われた経験こそが子どもたちの中に構築され、認知発達が促されると述べている。このことは、大人にやり方や答えを教えられた子どもたちよりも自身で考えて実践してみる方法を採用した子どもたちの方が認知発達が促されていたことから証明されている (Littleton & Wood, 2006)。つまり、遊び

のような自発的な経験の中で幼児の認知面の発達は促進されると言える。

そして、このような自発的な経験は子ども同士の関係の中で経験されやすい (橋本, 2001)。幼児期は生活の大半が遊びに費やされるが、杉原 (2014) は、遊びの中でも特に内発的に動機づけられた運動遊びが社会性の発達や認知発達には重要な経験となることを主張している。例えば鬼ごっこでは、オニ役になった時の動きや気持ちと、コ役になった時の動きや気持ちという異なった立場を経験するが、このような経験が現在の自分とは異なった別の視点があることに気づかせ、遊びの中で社会性の基盤となる視点取得に向けた経験をすることができる (カミイ・デブリーズ, 1984)。このように運動遊びでは自ら決定した行動を介し成功や失敗の経験を積む。この自発的な経験こそが幼児の脱中心化 (decentration) を促すのであり、このようにからだを使った運動遊びは幼児期の脱中心化に大きく貢献する。本研究において、これまであまり焦点が当てられてこなかった幼児期のアサーションと運動遊びの中で経験される行動との関係が確認されたことは、アサーションの育成に対する運動遊びの有効性を示唆する新たな知見となるだろう。

一方で、アサーションの高低における共感性の差異は示されなかった。このことに関しては、2つの可能性が考えられる。1つ目は、共感性がたから取り鬼での視点取得行動とアサーションの間を調整しない可能性が挙げられる。アサーションの高さに視点取得の発達レベルが影響を与えるということに関しては一貫した結果が得られている (Abrahami et al., 1981; 安藤・新堂, 2013; Chandler et al., 1974)。それに対して、アサーションと共感性の関連については、アサーションには共感的要素が必要であるとされる一方で、両者は相反する概念であるとの指摘もあり、一貫した結果は得られていない (Lizarraga et al., 2003)。安藤 (2014b) は、アサーションを行動形態と捉え、これに影響を及ぼす個人要因として共感性との関連を検討したが両者の関連は示されなかったと報告している。本研究でもアサーションを行動レベルで捉えているため、安藤 (2014b) の結果と同様に共感性との関連が示されなかったことが考えられる。

しかし、アサーションは他者の気持ちに寄り添いながら自己の主張をすることでお互いにストレスを感じにくく、円滑な対人関係が形成されると考えられている (平木, 2009)。したがって、アサーティブな主張が行われるためには、共感性は必要であると考えられる。そこで、共感性の影響が見られなかったもう1つの可能性として考えられるのは、本研究で用いた共感性がアサーションとの関係を示すうえで適切でなかった可能性である。

本研究では、他者の感情を認知して共感するという感情レベルでの共感性を用いたが、Feshbach & Roe (1968) は、6～7歳では他者の感情認知はほぼ達成されることを示している。本研究の対象は6歳児であり、実際に、アサーションの高低に関係なく対象児は全体的に高い共感性が確認された。よって、アサーションとの関連に関して共感性の特徴を示すことができなかったと考えられる。また、森下 (1990) の作成した幼児の共感性

尺度は、他者の感情を認知しそれに共感するという感情レベルでの共感性と、思いやりや正義感のある行動などの共感性に基づいて実際に行動するという行動レベルでの共感性で構成されており、本研究では、他者を理解できることに焦点を当てていたため、感情レベルの共感性の測定に限っていた。しかしながら、森下 (1990) は幼児を対象に、社会的行動の1つである援助行動に対する共感性の影響を調査した中で、感情レベルの共感性の高さによって援助行動の有無は特定されないことを報告している。その一方で、行動レベルでの共感性が高い幼児は進んで援助行動をするが、行動レベルでの共感性の低い幼児は援助行動をしないことが明らかになり (森下, 1990)、これらの結果は、社会的な行動を検討する際には行動レベルで共感性を捉える必要があることを示唆している。また、比較認知科学の観点からも、単に相手の感情に同調したり相手の状況を理解するだけでは援助行動は生じにくく、援助行動などの社会的な行動には相手の状況を理解したうえで他者に合わせた行動をとることが重要であると考えられている (ドゥ・ヴァール, 2009)。以上の知見に基づく、本研究ではアサーティブ行動のような社会的行動を促すレベルの共感性を捉えることができていなかった可能性があると考えられる。

また、本結果では、アサーションの高低によって視点取得行動の割合が有意に異なったが、Table1の個別データにみられるように、アサーションは高いが視点取得行動の割合が低い幼児も存在した (B, E 児)。このような幼児のたから取り鬼における行動の特徴としては、B 児は陣に近づいた相手を追い払うように相手に近寄り相手が遠ざかると追うのをやめるという行動が多く見られ、E 児は自陣の宝を守っていることが多かった。したがって、B 児や E 児にとってたから取り鬼での目的が相手を捕まえることや相手の宝を取ることではなく、宝を守ることであり、視点取得行動に関しては、相手が到達する地点を予測し、より近い道のり (より直線的に) その地点に到達す

るような行動という定義が当てはまらなかった可能性もあると言える。

V. 本研究の課題と今後の展望

本研究では、アサーションの高低における共感性の差異を確認することができず、また、予想と異なる傾向の対象児が存在した。この問題を解決するために、今後の研究では、共感性に関して、行動レベルで共感性を捉える必要があると考える。

また、本研究では大きな効果量が得られており、少ないサンプル数の中でも重要な示唆を得られたと言える。しかし、対象園が1園のみであり、園の特徴を排除することができていない。そのため、今後は複数園を対象として検討する必要がある。

VI. 文献

- 1) Abrahams, A., Selman, R. L. & Stone, C. (1981) A developmental assessment of children's verbal strategies for social action resolution. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 2 : 145-163.
- 2) アルベルティ R. E.・エモンズ M. L. : 菅沼憲治・ジャレット純子訳 (2009) 自己主張トレーニング 改訂新版. 東京図書.
- 3) 安藤有美 (2014a) 自己表現行動に関わる心理社会的規定要因の研究. 博士論文, 名古屋大学, 愛知県名古屋市.
- 4) 安藤有美 (2014b) 自己表現に及ぶ個人要因と状況要因による影響—自己表現における行動形態についての選好比較—. *四国大学紀要*, 43: 101-110.
- 5) 安藤有美, 新堂研一 (2013) 非行少年における視点取得能力向上プログラムの介入効果—視点取得能力と自己表現スタイルの選好との関連—. *教育心理学研究*, 61 : 181-192.
- 6) Chandler, M. J., Greenspan, S. & Barenbomi, C. (1974) Assessment and training of role-

taking and referential communication skills in institutionalized emotionally disturbed children. *Developmental Psychology*, 10 : 546-553.

- 7) Crockenberg, S. & Litman, C. (1990) Autonomy as competence in 2-year-olds: Maternal correlates of child defiance, compliance, and self-assertion. *Developmental Psychology*, 26 : 961-971.
- 8) DeVries, R., Hildebrandt, C. & Zan, B. (2000) Constructivist early education for moral development. *Early Education and Development*, 11 : 9-35.
- 9) ドウ・ヴァール F. : 柴田裕之訳 西田利貞解説 (2009) 共感の時代—動物行動学が教えてくれること—. 紀伊國屋書店.
- 10) Feshbach, N. D. & Roe, K. (1968) Empathy in six- and seven-year-olds. *Child Development*, 39 : 133-145.
- 11) 橋本祐子 (2001) 構成論に基づく保育プログラムにおける道徳教育の実践—理論的背景と新たな展開—. *Educare*, 22 : 21-30.
- 12) 畠山美穂, 畠山 寛 (2012) 関係性攻撃幼児の共感性と道徳的判断, 社会的情報処理過程の発達研究, 発達心理学研究, 23 : 1-11.
- 13) 畠中智恵 (2020) 幼児用主張行動尺度作成の試み—信頼性と妥当性の検討—. *パーソナリティ研究*, 28 : 233-242.
- 14) 平木典子 (2009) 改訂版アサーション・トレーニング—さわやかな自己表現のために—. 金子書房.
- 15) カミイ C.・デブリーズ R. : 成田錠一監訳 (1984) 幼稚園・保育所集団遊び—集団ゲームの実践と理論—. 北大路書房.
- 16) 公益社団法人全国労働衛生団体連合会 (2017) 統計情報 患者調査 Retrieved from <http://www.zeneiren.or.jp/cgi-bin/pdfdata/20110316201549.pdf> (2019年4月11日)
- 17) 松原耕平, 新屋桃子, 佐藤 寛, 高橋高人, 佐藤正二 (2019) 幼児の社会的スキルと問題行動が児童期の社会的スキルと抑うつに及ぼす

- 影響. 認知行動療法研究, 45 : 39-50.
- 18) 溝川 愛, 子安増生 (2015) 他者理解と共感性の発達. 心理学評論, 58 : 360-371.
- 19) Mnookin, H. R., Peppet, S. R. & Tulumello, A. S. (1996) The tension between empathy and assertiveness. *Negotiation Journal*, 12 : 217-230.
- 20) 森 司朗 (1999) 幼児の「からだ」の共振に関して—対人関係的自己の観点から—. 保育学研究, 37 : 152-158.
- 21) 森下正康 (1990) 幼児の共感生が援助行動のモデリングにおよぼす効果. 教育心理学研究, 38 : 174-181.
- 22) Littleton, K. & Wood, C. (2006) Psychology and education: Understanding teaching and learning. In Wood C., Littleton K. & Sheehy K. (Eds.) *Developmental Psychology in Action* (pp. 201-229). Malden: Blackwell Publishing Ltd.
- 23) Lizarraga, M. L., Ugarte, M. D., Cardelle-Elawar, M., Iriarte, M.D. & Baquedano, M.T. (2003) Enhancement of self-regulation, assertiveness, and empathy. *Learning and Instruction*, 13 : 423-439.
- 24) ピアジェ J. : 中垣 啓訳 (2007) ピアジェに学ぶ認知発達の科学. 北大路書房.
- 25) Romano, J. M. & Bellack, A. S. (1980) Social validation of a component model of assertive behavior. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 48 : 478-490.
- 26) 佐々木正人 (1987) からだ—認識の原点—. 戸田正直, 東 洋, 波多野誼余夫, 長尾 真, 佐伯 胖, 大津由紀雄, 辻井潤一 (編) 認知心理学選書15. 東京 : 東京大学出版.
- 27) 柴橋祐子 (2001) 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち. 発達心理学研究, 12 : 123-134.
- 28) 柴橋祐子 (2004) 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因. 教育心理学研究, 52 : 12-23.
- 29) Speed, B. C. Goldstein, B. L. & Goldfriend, M, R. (2018) Assertiveness training: A forgotten evidence-based treatment. *Clinical Psychology*, 25 : 1-20.
- 30) 杉原 隆 (2014) 幼児期の発達の特徴に応じた運動指導のあり方. 杉原 隆, 河邊貴子 (編著) 幼児期における運動発達と運動遊びの指導—遊びのなかで子どもは育つ— (pp.45-64). 東京 : ミネルヴァ書房.
- 31) 千葉浩彦 (1990) むかう感情・ゆるる感情—表情フィードバックと共振性からの検討—. 佐伯 胖, 佐々木正人 (編著) アクティブ・マインド—人間は動きのなかで考える— (pp.111-140). 東京 : 東京大学出版会.